パーソナリティ研究
2006　第14巻　第2号　181–193

原　著

© 日本パーソナリティ心理学会 2006

日本における青年期用対象関係尺度の開発

井梅由美子　お茶の水女子大学
平井洋子　首都大学東京
青木紀久代　お茶の水女子大学
馬場禮子　山梨英和大学

本研究では，青年期における対象関係を評価する尺度を作成した．分析1では，単純構造の尺度を目指して，各尺度の内容が重複しないよう測定内容の整理を行い，5つの測定内容を設定した．因子分析の結果(N=566)，「①親和不全」「②希薄な対人関係」「③自己中心的な他者操作」「④一体性の過剰希求」「⑤見捨てられ不安」の5因子で単純構造を示す尺度構成が確認された．分析2-1では，異なるサンプル (N=1041)を用いて交差妥当性を確認した．その結果，分析1とほぼ同様の因子構成が見られ，5つの測定領域を設定することの交差妥当性が示された．分析2-2では，性差・年齢差の検討を行い，予想された箇所で予想された方向に性差と年齢差が得られた．分析2-3では，NEO-FFI (NEO Five Factor Inventory) を用いてパーソナリティ特性との関連を検討し，概ね仮説を支持する内容の相関が見られた．これらの結果から，作成された尺度の構成概念妥当性が確認された．

キーワード：対象関係，質問紙，青年期

問題と目的

対人関係には，親子関係，友人関係，夫婦関係あるいは恋人関係などさまざまなものがある．こうした対人関係が個人の精神的健康に及ぼす影響は大きく，多くの心理学研究の対象となってきた（たとえば，親子関係では，落合・佐藤 (1996)，小山 (1999)，久保 (2000)，酒井 (2001)，友人関係では，上野・上瀬・松井・福富 (1994)，岡田 (1995, 2002)，黒田・有年・桜井 (2004)，夫婦あるいは恋人関係では，詫摩・戸田 (1988) など）．これらの研究では，その人にとって重要な他者との関係が，各発達段階において個人の情緒的発達，および精神的健康に大きな影響を及ぼすことが示されている．

個人が重要他者とどのような関係にあるかは，心理臨床の診断や介入においても，まず注目される重要なポイントである．なぜなら対人関係に問題を抱える人は，幼少時は親，青年期は友人・恋人，成人期には配偶者など，発達段階ごとに“重要他者”は入れ替わるものの，同じパターンの対人的問題をくり返すことが多いからである．心理臨床では，このくり返されるパターンを見出し，改善することが目指される．

精神分析的な治療理論では，こうした対人関係性を対象関係 (Object Relations) という概念で扱う．対象関係とは，「対人場面における個人の態度や行動を規定する，精神内界における自己と対象（他者）との関係性の表象」である．対象関係は，現実の対人関係と密接に関わるものの，表面的にはさまざまな形をとって表れ，一見相容れない行動が併存することもあるなど，その関係は複雑である（藤山，2002）．

対象関係は，適応的・非適応的という軸上で議論することができる (Bellak, Hurvich & Gediman, 1973)．Bellak et al.は，対象関係に①自己・他者の関係の種類と程度，②成熟・発達の程度，③自己・他者の分化の程度，④対象恒常性 という4つ

の側面を設け，個人がそれぞれの側面でどの適応段階にあるかを総合的に判断することによって対象関係を評価することを試みた．一般に対象関係が適応的な段階にあると，対象が目の前にいなくても相手が愛や慰めを与えてくれるというイメージを保てたり，対人場面で葛藤が生じても柔軟に内的表象の修正を行ったりすることができる（馬場，2002）．一般的には発達とともに対象関係も適応的な段階へと成熟するが，それが途中で固着したまま思春期，青年期を迎えると，対人場面でしばしば同じパターンの問題をくり返すことになる．

近年，学生相談室を訪れる学生の中に，境界性人格障害，あるいは自己愛の病理が疑われるケースが増えている（加藤・濱田・鈴木，1998; 生地，2000）．こうした援助機関への来談に至らなくても，対人関係に問題を抱える青年は少なくない．彼らの問題の背景には，対人スキルの未熟さのほか，自己中心性や自他境界の未分化，見捨てられ不安，対人信頼感の欠如などが存在していると考えられる．いずれの要因も対象関係の歪みという視点から捉えることが可能なことから，青年期の心理的援助において，対象関係を適切に評価することは，大変重要であるということができる．

これまで心理臨床の現場では，対象関係の評価は面接を通じて行われることが一般的であった．Bellak et al. (1973) は，4つの側面ごとに面接用の質問項目を用意し，これらを全体的に評価して対象関係を査定する方法をとっている．

面接によらず評価する試みとしては，投映法検査に一定の客観的基準を設けて評価する方法があげられる．たとえば Westen (1991) は TAT を，Blatt, Brenneis, Schimek & Glick (1976) や Urist (1977) はロールシャッハテストを用いて，それぞれ対象関係を評価するための指標を提案している．一方，質問紙尺度によるアプローチはほとんど見当たらず，実証的な裏づけがある尺度としては BORI (Bell Object Relations Inventory; Bell, Billington & Becker, 1986) 以外ほとんど見当たらないといってよい[1]．BORI は，孤立 (Alienation)，不安定な愛着 (Insecure Attachment)，自己中心性 (Egocentricity)，対人的能力不足 (Social Incompetence) の4下位尺度（全45項目）から構成される．下位尺度は互いに相関を持ち，尺度得点には斜交因子解の因子得点が使われる (Bell, 1995; Bell, et al., 1986)．最近になり，項目に3段階の重みをつけた手採点可能な簡易採点方式が出版されたが (Bell, 2005a)，下位尺度項目の42.1%が複数の下位尺度で得点化されるなど，下位尺度間の構造には構成概念間の関連性のほか人工的な相関が入り込み，複雑で理解しにくい．また，項目にかかる重みや標準化データはアメリカの母集団をもとにしているため，日本でそのまま用いるには問題がある．

日本における対象関係評価の試みは，上述の Westen (1991) を改訂して作られたもの（関山，2001）や，ロールシャッハテストを用いたもの（鈴木，1991, 1992, 1993, 1994a, 1994b）があり，質問紙尺度としては，井梅 (2001) や重松 (2005) があげられる．重松 (2005) は，内在化された対象や記憶の想起能力に焦点をあて，“永続しない対象”，“悪い対象”，“良い対象”の3つの下位尺度から内的対象を測定している．この尺度は“情緒的対象恒常性”に焦点をあて，想起される内的対象の質を測定するものと位置づけられる．

一方，井梅 (2001) では，予備調査で BORI の4下位尺度を日本人に行い，同様の因子構造が得られなかったことから，対象関係に問題が多いとされる人格障害者についての日本の臨床知見（町沢，1989；井沢・大野・浅井・小此木，1995; 三宅・皆川・守屋・生田・宮本・小此木，1987; 皆

1) 成人用の BORI に対し，思春期版の BRIA (Bell Relationship Inventory for Adolescents; Bell, 2005b) も出版されている．この検査は，BORI の4尺度にポジティブ・アタッチメント (Positive Attachment) を加えた5尺度（全50項目）から構成され，基本的な枠組みは BORI を踏襲している．

川・三宅，1993; 皆川・三宅・守屋・生田・西園，1994）や，DSM-IV（APA, 1994 高橋・大野・染矢訳，1995）をもとに，質問項目を新たに作成している．因子分析の結果，“回避性”，“自他の境界の未分化”，“自己中心性”，“関係性維持の困難”，“見捨てられ不安”の5つの下位尺度が得られ，対象関係を分析的・多面的に捉えようとしたものといえる．しかし，これらの下位尺度は尺度間相関が高く，プロマックス回転では複数因子に高い負荷を持つ項目が少なからず出現した．

井梅 (2001) の5尺度は，測定内容の点では臨床心理的な症例を説明するのに有効といえるが，因子が単純構造を示さないことから，尺度得点を求める際にBORIと同様の問題が生じる．そこで本研究では，井梅 (2001) の5尺度を再検討し，臨床的有用性を残しながらも，単純構造といえる因子からなる質問紙尺度を作成することを目指す．これにより，面接や投映法と違って実施者に専門性が必要なくなること，客観的に尺度得点が求められること，単純構造により各下位尺度の測定内容が明確になること，および採点がしやすくなることが期待できる．

具体的には，分析1で測定内容の整理を行い，因子分析によって下位尺度を構成する．分析2では，異なるサンプルを用いて因子構成の交差妥当性を確認し，性差，年齢差の検討を行う．さらに，一部の調査協力者にNEO-FFI（NEO Five Factor Inventory; 下仲・中里・権藤・高山，1999）を施行した結果を用いて，パーソナリティ特性との関連を検討する．以上から，全体として各下位尺度の構成概念妥当性を検討する．

分析1

方　法

測定領域の定義と項目作成　井梅 (2001) による5下位尺度，および，対象関係に関する理論（Kernberg, 1976 前田訳，1983; Bellak et al. 1973）の検討を行い，対象関係の測定領域を以下の5つに設定した．その際，内容が重複しないようそれぞれの要素を整理し，かつ，測定領域に忠実となるよう尺度名を新たに命名した[2)]．

①親和不全：対人的なやりとりにおいて，自ら壁を作り，緊張して打ち解けられない．また，深くつきあうことに恐れがある．②不安定で希薄な対人関係：他者に対する評価が安定せず，相互理解やサポートの授受など実質的な中身を伴う対人交流ができない．③自己中心性：自分が優れているという独善的な思いがあり，自分のために他者が動いてくれることを当然と考える．また自分の欲求を実現するために他者を操作的に利用しようとする．④一体性の過剰希求：他者との心理的距離が過度に近く，自分の要求や行動が相手と100%共有されるはずだと思い，そのような相手を求める．⑤見捨てられ不安：親しい人から拒絶され，取り残されることに対する恐れが強く，相手の反応に過敏である．

このうち，「①親和不全」―「②不安定で希薄な対人関係」間には，相手への基本的信頼感に欠け，しっかりした人間関係が築けない点で共通点があると想定される．また，「①親和不全」―「⑤見捨てられ不安」間には，前者が自分の内面の壁に焦点をあて，後者が相手の反応に過敏になる傾向に焦点をあてているという違いはあるものの，打ち解けた関係を築けないという点で共通点が想定される．「④一体性の過剰希求」―「⑤見捨てられ不安」間には，自己が他者と独立した人格として確立していない点で共通点が想定される．「③自己中心性」は優劣の次元が持ち込まれる点で他の4領域と相対的に異質な存在であるが，健全な共感性が発達していない点では他の4領域と関連がないわけではない．

2) 「①親和不全」は“回避性”に，「②不安定で希薄な対人関係」は“関係性維持の困難”に，「③自己中心性」は“自己中心性”に，「④一体性の過剰希求」は“自他の境界の未分化”に，「⑤見捨てられ不安」は“見捨てられ不安”に概ね対応している．

この5つの測定領域について，それぞれ7項目ずつ用意した．まず臨床心理学を専門とする大学教員と大学院生が①から⑤にあげた測定領域の定義に合致する項目を作成し，その後あらためて項目表現の修正や新規項目の追加を行った．次に，心理学的測定を専門とする大学教員が，各測定領域が適切に代表されているかを確認した．

調査対象　関東の国公私立大学に通う大学生と社会人．個別に調査協力を依頼して質問紙を配布（一部の協力者には郵送）した．属性欄の不備から大学の数や社会人の構成比率は不明である．回答態度に問題のあるデータのほか，本研究が青年期を対象としていることから30歳以上のデータを除外した．結果的に分析に用いたのは男性261名，女性305名，計566名，平均年齢は20.5歳（18歳から29歳，*SD*=1.85）であった．平均年齢に性差はなかった．

調査時期　2002年7~8月．

質問紙　上述の手続きを経て作成された35項目とフィラー項目19項目から構成された．それぞれ，“とてもそう思う”から“全くそう思わない”までの6件法で回答を得た．なお，BORIでは，2件法を採用しているが，本尺度では，因子分析を行う際に間隔尺度として使いやすく，少ない項目数で一定の信頼性を確保するために，6件法を用いた．質問紙内での項目の並び順は，同じ領域が固まらないように配慮した．

分析内容と手続き　5つの測定領域ごとに1因子を指定した因子分析（最尤法）を行い，因子負荷が.35未満の項目を削除した．その後残った項目を同時にプロマックス回転（最尤法）にかけ，単純構造を示す尺度構成が達成されているかどうかを検討する．各因子分析において欠測値のあるデータはlistwiseで削除する．これらの分析によって尺度を構成するための項目を選択する．

結　果

測定領域ごとの因子分析の結果，以下のように項目の選択と測定領域の再定義を行った（Table 1).

①親和不全：1項目が除外されたが，項目内容を検討した結果，測定領域の再定義は必要ないと判断した（α=.782, *N*=555)．②不安定で希薄な対人関係：2項目が除外された．それにより測定領域が若干狭くなったため，「希薄な対人関係」と再定義した（α=.739, *N*=554)．③自己中心性：2項目が除外された．測定領域が若干狭くなったため，「自己中心的な他者操作」と再定義した（α=.748, *N*=556)．④一体性の過剰希求：1項目が除外されたが，測定領域の再定義は必要ないと判断した（α=.751, *N*=558)．⑤見捨てられ不安：削除された項目はなかった（α=.797, *N*=559).

5つの領域で選択された計29項目による相関行列の固有値を算出したところ，第1固有値から順に，20.4, 11.3, 8.4, 5.2, 5.0, 3.5, 3.3…であった．第5固有値と第6固有値との間で比較的ギャップが見られ，第5固有値までで相関行列の分散の50.3%が説明されていること，および因子の解釈可能性から5因子解を採用できると判断した．プロマックス回転（最尤法，5因子指定）の結果得られた因子パタンをTable 2の「分析1」の欄に示す(*N*=537).

本来所属すべき因子より他の因子の方に大きな因子負荷を持った項目が“親和不全6”と“一体希求5”の2項目生じた．この2項目について，それぞれ本来の因子に所属させた場合と因子負荷の高かった因子に所属させた場合についてα係数を比較したが，差はほとんどなかった．どちらの項目とも因子間相関が高いことが原因で負荷が不安定になっている可能性があり，意味的には本来の因子に所属させるべきものなので，ここでは判断保留とし，分析2の交差妥当化データの結果を待つこととした．

分析2

方　法

調査対象　関東の国公私立大学に通う大学生と

Table 1　対象関係 5 下位尺度の項目と各下位尺度の 1 因子解

項目名と内容	因子負荷
①「親和不全」α=.782 N=555	
親和不全 1：私は，人とどうやって会ったり話したりしていいのかわからない	.736
親和不全 2：私は自分の心に壁を作ってしまい，周りをよせつけないところがある	.734
親和不全 3：私は人となかなか親しくなれない	.682
親和不全 4：私は他人と深くつき合うことを恐れている	.565
親和不全 5：人のそばにいると，緊張して落ち着かないことが多い	.553
親和不全 6：私には，親しい相手との関係を，自分から切ってしまうところがある	.398
親和不全 7：親しい人と意見が合わない時，上手にそれを解決することができる (−)*	.272
②「希薄な対人関係」α=.739 N=554	
関係希薄 1：本当の自分を理解してくれていると思える人がいる (−)	.690
関係希薄 2：私には，本当に困ったとき，助けてくれると思える人がいる (−)	.663
関係希薄 3：私は親しい人（家族や恋人，親友など）に自分の要求を適切に伝えることが出来る (−)	.587
関係希薄 4：私は人間関係を大事にしており，それによって多くのものを得ている (−)	.573
関係希薄 5：友人関係は比較的安定している (−)	.482
関係希薄 6：最初，とても信頼できると思った人に，後で失望することが多い *	.262
関係希薄 7：私は，身近な人に対する評価がころころと変わる *	.171
③「自己中心的な他者操作」α=.748 N=556	
自己中心 1：人を思い通り動かすのは，私の密かな楽しみである	.735
自己中心 2：私には，欲求を満たそうとして，自分の思い通りになるよう相手を仕向けるところがある	.724
自己中心 3：自分が思う通りに人の気持ちを仕向けていくことが，人とのつきあいで重要なことである	.587
自己中心 4：自分の欲望を満たすために，人を利用することは悪いことではないと思う	.515
自己中心 5：人との関係で私が重点を置くことは，常に相手より優位な立場になることである	.496
自己中心 6：人からアドバイスをもらっても，自分の考えが正しいと思うので，あまり気にとめない *	.313
自己中心 7：世間は私に対して冷たい *	.214
④「一体性の過剰希求」α=.751 N=558	
一体希求 1：親しい人とは，何をするにも一緒に行動をしないと気が済まない	.708
一体希求 2：親しい人には，自分を “100%” 受け入れてもらいたい	.587
一体希求 3：私は完全に一心同体になれる人を求めている	.580
一体希求 4：私を本当に想ってくれる人なら，私の要求をすべて受け入れてくれるはずである	.579
一体希求 5：私は常に誰かといっしょにいないと不安である	.544
一体希求 6：母親なら，私の望みをかなえてくれて当然だ	.497
一体希求 7：人間関係は，常に連絡を取っていないと途切れてしまうように感じる *	.315
⑤「見捨てられ不安」α=.797 N=559	
見捨不安 1：何かにつけて置いてきぼりにされそうで，よく心配になる	.673
見捨不安 2：ひょっとして大切な人から拒絶されるのでは，という恐れをいだくことがある	.656
見捨不安 3：私は人と接する時，人の顔色をとても気にする	.642
見捨不安 4：親しい人に自分の考えを否定されるとひどく傷つく	.609
見捨不安 5：身近な人が私以外のものに気をとられたら，拒絶された感じがして傷つく	.558
見捨不安 6：とても親しい相手であっても，いつか裏切られるのではという不安を感じることがある	.550
見捨不安 7：私は他人からの否定的な態度・素振りにひどく敏感で傷つきやすい	.513

* 不採用項目　(−) 逆転項目

Table 2　2つのデータによるプロマックス回転の結果

項目	分析1 (*N*=537)					分析2-1 (*N*=1041)				
	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
親和不全1	.137	.691	−.004	.002	−.002	.158	.669	.032	−.007	−.093
親和不全2	.088	.678	.008	−.042	.039	.078	.655	−.110	−.060	.129
親和不全3	−.149	.855	−.117	−.034	.034	−.067	.807	−.004	−.027	−.121
親和不全4	.099	.371	.306	.001	−.020	.073	.535	−.046	.118	.024
親和不全5	.144	.408	.125	−.003	.009	.171	.568	.044	−.046	−.032
親和不全6	−.026	.199	.302	.133	.044	.077	.371	−.079	.084	.239
関係希薄1	.055	−.176	.807	−.096	.028	.064	−.085	−.111	.784	.034
関係希薄2	−.083	−.092	.696	.005	.050	−.023	−.076	.050	.786	−.006
関係希薄3	.142	.095	.565	−.085	−.116	.204	−.042	−.087	.609	−.053
関係希薄4	−.234	.313	.470	.083	−.080	−.333	.305	.146	.470	−.085
関係希薄5	−.022	.217	.342	.054	.064	−.122	.278	.101	.415	.016
自己中心1	−.076	.007	.059	.011	.732	−.085	−.016	.006	−.049	.732
自己中心2	.096	.077	−.094	−.068	.759	.075	.001	−.012	−.067	.711
自己中心3	.050	−.083	.005	.143	.541	−.071	−.060	.127	−.056	.575
自己中心4	.022	.032	−.012	−.184	.587	.008	−.041	−.103	.106	.526
自己中心5	−.128	.055	.067	.224	.421	.001	.072	.102	.012	.475
一体希求1	.033	−.083	.058	.679	.029	.028	.014	.658	.048	.011
一体希求2	.153	.016	−.194	.534	−.089	.126	−.118	.613	−.123	−.106
一体希求3	.000	.011	−.048	.610	−.061	.067	.013	.503	−.040	.052
一体希求4	−.108	−.041	.110	.662	−.019	−.094	.044	.604	.055	.123
一体希求5	.365	−.069	.025	.317	.032	.266	−.170	.450	.040	−.010
一体希求6	−.029	.090	−.081	.479	.071	−.107	.044	.526	.001	.001
見捨不安1	.654	.048	.053	−.001	.017	.592	.133	.080	.044	.005
見捨不安2	.785	−.107	.034	−.185	.032	.768	−.020	−.124	.074	.024
見捨不安3	.654	.118	−.071	−.039	−.046	.697	−.012	.017	.004	−.074
見捨不安4	.559	.032	−.154	.100	.036	.515	.005	.167	−.039	−.048
見捨不安5	.413	−.110	.048	.268	.076	.425	.066	.215	.029	.072
見捨不安6	.443	.045	.280	.057	−.004	.490	.076	.056	.215	.063
見捨不安7	.427	.094	−.056	.144	−.111	.618	.120	−.042	−.204	−.033

社会人．個別に調査協力を依頼して質問紙を配布（一部の協力者には郵送）した．大学の数や社会人の構成比率は不明である．回答態度に問題のあるデータのほか，本研究が青年期を対象としていることから30歳以上のデータを除外した．結果的に分析に用いたのは，男性435名，女性606名，計1041名，平均年齢20.6歳（18歳から29歳，*SD*=1.71）であった．平均年齢に性差はなかった．

調査時期　2003年7~9月．

調査内容　①分析1で選択された29項目（保留の2項目も含む）．“とてもそう思う”から“全くそう思わない”までの6件法で回答を得た．質問紙内での項目の並び順は分析1と同様である．②日本版NEO-FFI全60項目．“非常にそうだ”から“全くそうでない”までの5件法で回答を得た．NEO-FFIは上記調査協力者のうち70名に施行した．

分析内容と手続き　分析2-1では交差妥当化を行い，29項目による因子分析（プロマックス回

転，最尤法）によって，各項目が想定された測定領域に分かれることを確認する．欠測値のあるデータは listwise で削除する．分析 2-2 では下位尺度ごとの記述統計量に基づき，性差・年齢差を検討する．分析 2-3 では NEO-FFI との関連を検討する．

結　果

分析 2-1

29 項目による相関行列の固有値を検討したところ，第 5 固有値までで相関行列の分散の 52.1% が説明され，スクリープロットの形状も 5 因子解を示していた（第 1 固有値から順に，23.3, 12.0, 7.4, 5.3, 4.1, 3.3, 3.2 …）．プロマックス回転（最尤法，5 因子指定）の結果得られた因子パタンを，Table 2 の「分析 2-1」の欄に(N=1041)[3]，因子間相関を Table 3 示す．

Table 2 を見ると，分析 1 で保留となった“親和不全 6”と“一体希求 5”を含むすべての項目が想定どおりの因子にまとまり，他の因子の方が高い負荷を持つケースは生じなかった．因子間相関が高いことによる不安定さの懸念が残るものの，ほぼ単純構造をなす項目群を形成できたということができる．因子間相関が高い箇所は，「①親和不全」―「②希薄な対人関係」の.603，「④一体性の過剰希求」―「⑤見捨てられ不安」の.536，「①親和不全」―「⑤見捨てられ不安」の.489 であり，当初予想された箇所で相対的に高い相関が見られた．また，「③自己中心的な他者操作」も当初の予想通り他の因子と全般的に弱い正の相関を持った．

Table 3　対象関係尺度の因子間相関（分析 2-1 N=1041）

	①	②	③	④	⑤
①親和不全	1.000				
②関係希薄	.603	1.000			
③自己中心	.294	.178	1.000		
④一体希求	.192	.009	.359	1.000	
⑤見捨不安	.489	.213	.354	.536	1.000

3) 各項目が想定される因子のみに負荷を持ち，因子間相関を認めたモデルの適合度を求めたところ，GFI=.895, CFI=.868, RMSEA=.058 となった．

各項目が想定した因子群に分かれたこと，因子間相関がほぼ想定通りのパターンを示したこと，および因子負荷や因子間相関の値が分析 1 との間で比較的安定していたことから，この 5 領域 29 項目を用いて単純構造をなす下位尺度を構成することができると判断した．

分析 2-2　5 つの下位尺度の記述統計量と性差・年齢差

下位尺度得点には，それぞれの測定領域に属する項目の項目得点平均値を用いた．これは，得点の計算が簡便にできること，および各下位尺度の得点範囲が 1.0 点から 6.0 点に揃うために比較しやすいことを考慮したからである．

記述統計量　5 つの下位尺度得点の平均，標準偏差，α 係数と，一部のパーセンタイル得点を Table 4 に示す．平均と標準偏差の値から，各下位尺度得点が適度な水準と広がりを持つこと，すなわち日本人の一般的な青年における対象関係の歪みを適切に識別することができることが示唆される．α 係数は.739 から.834 の範囲にあるが，BORI では全 45 項目を用いた因子得点を用いながら.78～.90 であった (Bell, 1995) ことを考慮すれば，少ない項目数ながら一定の信頼性を確保できたといえる．パーセンタイル得点からは，「⑤見捨てられ不安」を除き，尺度得点が 4.0 を越えるケースは比較的稀なこと，高得点者の識別が比較的よくできることが指摘できる．

性差・年齢差の検討　2 要因の分散分析によって，各下位尺度得点の性差・年齢差を検討する．セルごとの標本サイズは，18～19 歳の男性 109 名，女性 224 名；20～22 歳の男性 254 名，女性 320 名；23～29 歳の男性 72 名，女性 62 名（合計 1041 名）である．

はじめに，性別と対象関係との関連についてであるが，青年期に出現する臨床症状を見てみると，

Table 4 下位尺度得点の記述統計量 (N=1041)

	平均	SD	α	主なパーセンタイル得点					
				25%	50%	75%	85%	90%	95%
①親和不全	2.86	.97	.812	2.17	2.83	3.50	3.83	4.17	4.50
②関係希薄	2.43	.89	.778	1.80	2.40	3.00	3.20	3.60	4.20
③自己中心	2.70	.87	.739	2.00	2.60	3.20	3.60	3.80	4.20
④一体希求	2.55	.89	.749	1.83	2.50	3.17	3.50	3.67	4.00
⑤見捨不安	3.42	.94	.834	2.86	3.43	4.00	4.29	4.57	5.00

Table 5 対象関係下位尺度の年齢別および性別の平均値（標準偏差）と分散分析結果 (N=1041)

	18～19歳		20～22歳		23～29歳			
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	性差	年齢差
n	109	224	254	320	72	62		( )内はF値
①親和不全	2.87 (0.92)	2.94 (0.96)	2.79 (0.91)	2.87 (1.06)	2.88 (0.96)	2.83 (0.88)		
②関係希薄	2.64 (0.87)	2.39 (0.87)	2.56 (0.92)	2.32 (0.89)	2.50 (0.96)	2.16 (0.68)	男>女 (17.35**)	
③自己中心	2.77 (0.95)	2.55 (0.86)	2.93 (0.85)	2.60 (0.83)	2.84 (0.99)	2.64 (0.77)	男>女 (14.78**)	
④一体希求	2.68 (0.86)	2.69 (0.87)	2.47 (0.84)	2.56 (0.98)	2.33 (0.71)	2.38 (0.84)		18>20, 23 (7.19**)
⑤見捨不安	3.53 (1.00)	3.61 (0.87)	3.25 (0.93)	3.50 (0.97)	2.95 (0.93)	3.35 (0.75)	男<女 (12.46**)	18>20>23 (9.73**)

**p<.01

女性は過食や拒食，手首自傷など，他者を巻き込む，すなわち他者との関係に絡んで不安を回避するタイプが多いのに対し，男性は，無気力，ひきこもりといった対人関係から退却するタイプが多く見られる（小此木，1998）．このような臨床知見から，「②希薄な対人関係」は男性の方が，「⑤見捨てられ不安」は，女性の方が高い得点を示すことが予想される．また，「③自己中心的な他者操作」は，反社会性人格障害や，サディズム性人格障害といった性格病理に関連する，自己愛的な誇大感やサディスティックな他者操作的態度を反映しており，これらの人格障害が男性に多いとされていることから（町沢，1995; 大野，1995），男性の方が高い得点を示すことが予想される．年齢と対象関係との関連では，一般に健常な発達過程をたどった場合，幼児期には対象関係の適応段階に達するとされ，青年期における対象関係の問題は，発達早期の歪みが修正されないまま現れたものとみなされている（Kernberg, 1976 前田訳，1983; 馬場，2002）．従って基本的に年齢差は予想されないが，「④一体性の過剰希求」と「⑤見捨てられ不安」については，第二の分離－個体化期の課題である個の確立とも関連することから，年齢が高くなるほど得点が低くなる可能性がある．

下位尺度ごとに分散分析を行った結果 (Table 5)，「①親和不全」では，性，年齢による効果はどちらもみられなかった．「②希薄な対人関係」では，性の主効果のみが有意となった (F(1, 1035)=17.35, p=.000)．男性の方が女性より得点が高いことがわかる．「③自己中心的な他者操作」では，性の主効果のみが有意となった (F(1, 1035)=14.78, p=.000)．男性の方が女性より得点が高いことが示された．「④一体性の過剰希求」では，年齢の主効果のみが有意となった (F(2, 1035)=7.19, p=.001)．シェッフェの多重比較を行った結果，18～19歳 vs. 20～22歳 (p=.022) と，18～19歳 vs. 23～29歳 (p=.001) の間に差が認められ，若年層ほど得点が高くなる傾向が見られた．「⑤見捨て

Table 6　NEO-FFI と対象関係尺度との相関係数 (N=70)

	①親和不全	②関係希薄	③自己中心	④一体希求	⑤見捨不安
神経症傾向 (N)	.456*	.289*	−.023	.072	.530*
外向性 (E)	−.573*	−.470*	−.003	.165	−.201
開放性 (O)	−.007	−.412*	−.095	−.145	−.075
調和性 (A)	−.465*	−.577*	−.320*	.175	−.154
誠実性 (C)	−.336*	−.254*	−.171	−.032	−.269*

*p<.05

られ不安」では，性，年齢の主効果が有意となった（それぞれ順に，$F(1, 1035)=12.46$, $p=.000$, $F(2, 1035)=9.73$, $p=.000$）．交互作用は有意ではなかった．女性の方が男性より，また年齢が若くなるほど得点が高くなることが示された．年齢に関してシェッフェの多重比較を行った結果，18〜19 歳 vs. 20〜22 歳 ($p=.011$)，20〜22 歳 vs. 23〜29 歳 ($p=.018$)，18〜19 歳 vs. 23〜29 歳 ($p=.000$)と，どの群の間にも差が認められた．

以上のように，性，年齢ともに予想された下位尺度で予想された方向の平均値差が得られた．

分析 2-3　NEO-FFI との関連

NEO-FFI は，人格特性を 5 つの軸から測定するものであるが，“Extraversion (E) 外向性”，“Agreeableness (A) 調和性”などは，他者との関わりに深く関連した人格の有様と考えられる．また，“Neuroticism (N) 神経症傾向”は，気分の不安定さや傷つきやすさなど，精神的な不適応感を測定しており，対象関係の成熟・発達の程度とも深く関わるものである．そこで，ここでは，対象関係 5 下位尺度と NEO-FFI 5 尺度との関連を検討する．分析に用いたデータは男性 24 名，女性 46 名，計 70 名，平均年齢 21.8 歳（18 歳から 28 歳，SD=3.22）であった．平均年齢に性差はなかった．以下に下仲ほか (1999) の定義から，対象関係下位尺度との関連を予測する．

NEO-FFI のうち，“Neuroticism (N) 神経症傾向”は気分の不安定さ，不安，傷つきやすさを表わすことから，「①親和不全」「②希薄な対人関係」「⑤見捨てられ不安」との間で正の相関が予想される．“Extraversion (E) 外向性”は，社交性や対外活動性を表わすことから，対人関係に消極的な意味を含む「①親和不全」および「②希薄な対人関係」との間に負の相関が予想される．“Agreeableness (A) 調和性”は他者との折り合いや信頼感を表わすため，「①親和不全」や「③自己中心的な他者操作」との間に負の相関が予想される．“Conscientiousness (C) 誠実性”は自己統制に，“Openness (O) 開放性”は知的好奇心に関する尺度であり，内容的に対象関係と関連が薄いため，特に仮説は設けない．

NEO-FFI と本尺度との間の相関係数を Table 6 に示す．「①親和不全」は予想された (N), (E), (A) のほか，(C) との間にも負の相関が認められた．「②希薄な対人関係」は，予想された(N), (E) のほか，(O), (A) との間にも中程度の負の相関を示し，NEO-FFI の各下位尺度と全般的に相関を示した．「③自己中心的な他者操作」は，予想された (A) との間だけに相関を示した．「④一体性の過剰希求」は予想された通り，どの尺度とも有意な相関を示さなかった．「⑤見捨てられ不安」は予想された (N) のほか，(C) とも弱い負の相関を示した．

以上を全体的に見ると，予想された箇所で予想された方向の相関が得られたといえるが，とくに「②希薄な対人関係」で予想されなかった箇所の相関が見出された．これは，「②希薄な対人関係」が心理的・社会的な不適応と広く関連する内容を含んでいる可能性を示すものといえよう．また，(C)は当初，対象関係下位尺度との相関を仮定しなかったが，「①親和不全」「②希薄な対人関係」

「⑤見捨てられ不安」で弱い負の相関を示した．(C)で測定している自己統制が，達成への意志の強さ，目的性などと関係しており（下仲ほか，1999），(N)と同様，対象関係の未熟さ，不安定さが，(C) の自己統制感と関係しているためと考えられる．なお，「③自己中心的な他者操作」「④一体性の過剰希求」においても，対象関係の未熟さは推測されるが，この2尺度の高得点者は，本人の不適応感，不安定さについての自覚が乏しく，(C) との関連が見られなかったと思われる．

分析2の結果をまとめると，分析2-1では理論的に想定された因子の構成，因子パタン，因子間相関が得られ，その内容は分析1とほぼ同様であったことから，5つの測定領域を設定することの交差妥当性が示された．分析2-2では，予想された箇所で予想された方向に性差と年齢差が得られた．分析2-3では，NEO-FFIとの相関関係が概ね予想されたように見出された．これらのことから，全体的に判断して，本研究で作成した5つの下位尺度の構成概念妥当性が概ね支持されたということができる．

考　察

本研究は，日本人の青年期における対象関係を，5つの側面から分析的・多面的に評価する尺度を作成したものである．対人関係の問題に心理的援助を行う際に重要となる要素を整理し，測定内容が重複しないよう単純構造化し，実施が簡便で手採点も可能な質問紙尺度とした．このような対象関係尺度は，日本においては本尺度が最初といえるであろう．以下，作成された5つの下位尺度が持つ意味をあらためて考察する．

「①親和不全」：この尺度は，対人的なやりとりにおいて自ら壁を作り，緊張して打ち解けられない傾向や，深くつきあうことを恐れる傾向を表わしている．

「②希薄な対人関係」：この尺度は，実質的な中身を伴う対人交流ができず，相互理解やサポートの授受などが希薄な傾向を表わしている．相手との基本的信頼関係が築けない点で「①親和不全」と共通点があるが，「①親和不全」と異なり性差が認められたり，開放性 (O) との間に負の相関が認められたりした．これらのことから，「①親和不全」では対人関係に消極的・回避的な心性が測定され，「②希薄な対人関係」では，心の頑なさや男性に多いとされる社会的スキル不足などからくる関係の希薄性が測定されていると考えることができる．また，「②希薄な対人関係」はNEO-FFIと広く相関を持ったことから，この関係の希薄性は心理的・社会的な適応に広く関連する内容であることが示唆される．この尺度の逆の方向は，ポジティブ・アタッチメントに関連するとも考えられ，他の下位尺度の上位概念である可能性もあると思われる．しかし，因子分析では一つの因子としてまとまったこと，内的一貫性がある程度高いこと(α=.778)，他の対象関係下位尺度との相関が必ずしも高くないことなどから，本研究では上位概念と位置づけるまでの結果が得られていないと判断し，他の下位尺度と同等の位置づけとした．「②希薄な対人関係」尺度の位置づけについては，今後の課題としたい．

「③自己中心的な他者操作」：この尺度は，自分のために他者が動くことを当然と考え，また自分の欲求を実現するために他者を操作的に利用しようとする傾向を表わしている．男性が高い得点を示したことから，自己優位的な視点が尺度の根底にあること，またNEO-FFIでは調和性(A)とのみ負の相関を持ったことから，健全な共感性が発達していないことが尺度の根底にあることが示唆される．

「④一体性の過剰希求」：この尺度は，他者との心理的距離が過度に近く，自分の要求や行動が相手と100%共有されるはずだと思い，またそのような相手を求める傾向を表わしている．「③自己中心的な他者操作」や「⑤見捨てられ不安」との相関があるが，この2尺度は，他者を自己とは区

別したものとして認めた上で相手を操作する傾向や相手の反応に過敏な傾向を測定している．一方「④一体性の過剰希求」は，他者を独立した他者と認められない，あるいは常に自分と同じだと思う傾向を測定している．これらの3尺度が互いに相関していたのは，いずれも自己中心的な視点に立っている点で共通していたからであろう．

「⑤見捨てられ不安」：この尺度は，親しい人から拒絶され取り残されることに対する恐れや，相手の反応に過敏な傾向を表わしている．「①親和不全」との相関があるが，「①親和不全」が自分の内面に焦点をあてているのに対し，「⑤見捨てられ不安」は相手の反応に注意が向いている．性差と年齢差が見られ，自我同一性との関連や女性に多いとされる相手への依存性との関連が示唆される．

次に本尺度の使用場面であるが，基本的には，臨床現場で第一次的な情報収集として実施されることが想定される．各下位尺度のα係数が示す通り，現時点での本尺度は個人の対象関係を精密に測定できているとはいえない．また，本研究が分析に用いたデータは普通に社会生活を送る人々で構成されているため，何点以上なら心理的援助が必要かというような判定基準を設けることはできない．本尺度を用いる際は，細かな得点差にこだわらないようにし，他の資料（心理検査や面接データなど）と一緒に用いることが望ましい．実践への応用としては，心理的援助・介入の必要性判断や効果測定に用いたり，予防的・発達的観点から，一般青年が自分の対人パターンを見直すといった自己理解を深めるものとしての使用も考えられる．研究への応用としては，一般的なパーソナリティ研究や対人関係の研究があげられる．

今後の課題としては，項目数を増やし信頼性を高めること，実際に心理的援助を受けている人に対して実施し，本研究における得点分布と比較しながら，尺度得点の絶対的な意味を明らかにしていくことがあげられる．また，青年期の不安や自我同一性，ポジティブ・アタッチメントなどとの関連を探りながら，各下位尺度の意味を精緻化していくことも必要である．本研究では盛り込めなかった対象関係の他の側面（たとえば回避的な心性や過度の自己愛など）を，さらに下位尺度として追加していくことも長期的な課題の一つといえる．

引用文献

アメリカ精神医学会 (APA)　高橋三郎・大野　裕・染矢俊幸（訳）1995　DSM-IV：精神疾患の診断・統計マニュアル　医学書院 (American Psychiatric Association 1994 *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, 4th Edition; DSM-IV.* Washington, D. C.: American Psychiatric Association.)

馬場禮子　2002　改訂境界例　ロールシャッハテストと心理療法　岩崎学術出版社

Bell, M. D. 1995 *Bell Object Relations and Reality Testing Inventory (BORRTI), manual*. Los Angeles: Western Psychological Services.

Bell, M. D. 2005a *Bell Object Relations and Reality Testing Inventory (BORRTI), hand-scoring materials*. Los Angeles: Western Psychological Services.

Bell, M. D. 2005b *Bell Relationship Inventory for Adolescents, manual*. Los Angeles: Western Psychological Services.

Bell, M. D., Billington, R., & Becker, B. 1986 A scale for the assessment of object relations: Reliability, validity, and factorial invariance. *Journal of Clinical Psychology*, **42**, 733–741.

Bellak, L., Hurvich, M., & Gediman, H. 1973 *Ego functions in schizophrenics, neurotics and normals*. New York: Wiley.

Blatt, S., Brenneis, C., Schimek, J., & Glick, M. 1976 Normal development and psychopathological impairment of the concept of the object on the Rorshach. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **85**, 364–373.

藤山直樹　2002　対象関係　小此木啓吾・北山　修（編）精神分析事典　岩崎学術出版社　Pp. 315–316.

井沢功一郎・大野　裕・浅井昌弘・小此木啓吾　1995　ミロン臨床多軸目録-II 境界性スケール短縮版の構成とその妥当性・信頼性の検証　精神科診断学，**6**, 473–483.

井梅由美子　2001　青年期・成人期を対象とした対象関

係尺度作成の試み お茶の水大学大学院人間文化論叢，**4**, 311–320.
加藤志ほ子・濱田庸子・鈴木典子 1998 学生相談における境界例とのかかわり 心理臨床学研究，**16**, 1–11.
カーンバーグ, O. 前田重治監（訳） 1983 対象関係論とその臨床 岩崎学術出版社 (Kernberg, O. 1976 *Object relations theory and clinical psychoanalysis*. New York: Jason Aronson.)
小山（井梅）由美子 1999 中学生の親子関係と学校適応感についての研究 お茶の水女子大学発達臨床心理学紀要，**1**, 1–10.
久保 恵 2000 対人恐怖心性と認知的・投影的親子関係像――内的ワーキングモデルの観点からの検討 教育心理学研究，**48**, 182–191.
黒田祐二・有年恵一・桜井茂男 2004 大学生の親友関係における関係性高揚と精神的健康との関係――相互協調的――相互独立的自己観を踏まえた検討 教育心理学研究，**52**, 24–32.
町沢静夫 1989 ボーダーライン・スケールの日本人への適用――日本における境界型人格障害の診断妥当性の検討 精神科治療学，**4**, 889–899.
町沢静夫 1995 B群クラスターB 福島 章・町沢静夫・大野 裕（編） 人格障害 金剛出版 Pp. 106–133.
皆川邦直・三宅由子 1993 境界例 医学書院
皆川邦直・三宅由子・守屋直樹・生田憲正・西園マーハ文 1994 境界型パーソナリティ障害とその診断基準 臨床精神医学，**23**, 857–863.
三宅由子・皆川邦直・守屋直樹・生田憲正・宮本政於・小此木啓吾 1987 DIB (Diagnostic Interview for Borderlines) による境界例診断の試み 精神科治療学，**2**, 401–409.
落合良行・佐藤有耕 1996 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究，**44**, 11–22.
生地 新 2000 現代の大学生における自己愛の病理 心身医学，**40**, 192–197.
岡田 努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究，**43**, 354–363.
岡田 努 2002 現代大学生の「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察 性格心理学研究，**10**, 69–84.
小此木啓吾 1998 思春期境界例と無気力・引きこもり 小此木啓吾・深津千賀子・大野 裕（編） 心の臨床家のための必携精神医学ハンドブック 創元社 Pp. 347–348.
大野 裕 1995 C群クラスターC 福島 章・町沢静夫・大野 裕（編） 人格障害 金剛出版 Pp. 134–159.
酒井 厚 2001 青年期の愛着関係と就学前の母子関係――内的作業モデル尺度作成の試み 性格心理学研究，**9**, 59–70.
関山 徹 2001 Social Cognition and Object Relations Scale 中京大学版 (SCORS − C) 評定マニュアル 中京大学心理学部紀要，**1**, 69–78.
重松晴美 2005 青年期における孤独感および内的対象の想起に関する研究 心理臨床学研究，**22**, 659–664.
下仲順子・中里克治・権藤恭之・高山 緑 1999 NEO-PI-R NEO-FFI 共通マニュアル 東京心理株式会社
鈴木正義 1991 ロールシャッハ尺度による対象関係の査定 (1) 人文論究（北海道教育大学函館人文学会），**52**, 1–26.
鈴木正義 1992 ロールシャッハ尺度による対象関係の査定 (2)――子どもの対象関係を中心に 人文論究，**54**（北海道教育大学函館人文学会）, 65–82.
鈴木正義 1993 ロールシャッハ尺度による対象関係の査定 (3)――子どもの対象関係について 人文論究（北海道教育大学函館人文学会），**55**, 101–124.
鈴木正義 1994a ロールシャッハ尺度による対象関係の査定 (4)――非臨床群の MOAS 基準についての検討 人文論究（北海道教育大学函館人文学会），**57**, 81–92.
鈴木正義 1994b ロールシャッハ尺度による対象関係の査定 (5)―― MOAS における健常者・神経症者・分裂病者の反応特徴 人文論究（北海道教育大学函館人文学会），**58**, 149–166.
詫摩武俊・戸田弘二 1988 愛着理論からみた青年の対人態度――成人版愛着スタイル尺度作成の試み 東京都立大学人文学報，**196**, 1–16.
上野良行・上瀬由美子・松井 豊・福富 護 1994 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究，**42**, 21–28.
Urist, J. 1977 The Rorschach test and the assessment of object relations. *Journal of Personality Assessment*, **41**, 3–9.
Westen, D. 1991 Clinical assessment of object relations using the TAT. *Journal of Personality Assessment*, **56**, 56–74.

― 2005. 6. 1 受稿，2005. 10. 14 受理―

Development of Object Relations Scale for Japanese Young Adults

Yumiko Iume[1], Yoko Hirai[2], Kikuyo Aoki[1] and Reiko Baba[3]

[1] Ochanomizu University
[2] Tokyo Metropolitan University
[3] Yamanashi Eiwa College

The Japanese Journal of Personality 2006, Vol. 14 No. 2, 181–193

Main purposes of this study were to construct object relations scale for young adults, and to examine validity of the scale. In Study 1, factor analysis on the data of 566 participants found five factors: insufficiency of intimacy, superficiality in interpersonal relations, egoistic manipulation, excessive need for identification, and abandonment anxiety. They had a simple structure with a total of 29 items. In Study 2, validity of the scale was examined with a new sample of 1041 participants. Data analysis showed validity in terms of the factor structure of the subscales, and gender and age differences found in them were in the expected patterns. The relationship to personality traits was examined with five factor scores of NEO-FFI. By and large, the correlation coefficients between the subscales and five factor scores were in the expected directions, indicating correlational validity of the scale.

Key words: object relations, scale construction, factor analysis, young adults